

新報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐の島町港町24
電話2-9772

キャリア教育の充実

日本の子供の課題として、国際的な調査から、「勉強が楽しい」、「勉強が将来役に立つ」、「将来望む仕事に就くために勉強が大切」と答える子供の割合が低いことがあげられています。また、全国学力・学習状況調査から家庭学習を平日一時間以上する中学生の割合が島根県が低かったこともあげられています。このような現状から児童生徒の学習意欲を高めていくことは、喫緊の課題となっています。学習意欲を高めるためには次の3点が大切だと言われています。

- なぜ、学ぶかはっきりしていること。
- 今学んでいることが、将来役に立つと思っていること。

○教室での学びと実社会が結

び付いていること。

つまり、「学習は自分の将来につながるもの」ということを子供たちにきちんと示していくことが問われています。そのため将来や実社会との結びつきを考え、キャリア教育の視点で教育活動を充実させていくことが重要であり、各校における取組の工夫が求められるところです。

教科におけるキャリア教育で大切な視点

今、体験ありきのキャリア教育を見直さなければならぬと言われています。体験活動が有効なことは言うまでもありませんが、体験をしなればキャリア教育ができないわけではありません。キャリア教育は自分の生き方・あり方を考えていく教育なので、部活動や生活指導を含め、学校生活全般で行うことが必要になります。そして、学校生

活の柱が教科の授業であり、教科におけるキャリア教育にどのように取り組むのかを考えていかなければなりません。国立教育政策研究所の長田氏が重要と指摘している、教科におけるキャリア教育の4つの視点について紹介しましょう。

教科における4視点

①「学習内容」

その教科で学ぶ内容が実社会で活用される場面を伝えることです。単元の中には、仕事や実生活で使える内容がたくさんあります。例えば、理科の「反射」や「図形の角度」を自動車におけるバックミラーの死角と絡めて説明すれば理解がより深まります。1ヶ月に数回「ここだ」という場面がいいのです。「この学習内容は、〇〇で役立ってるね」と伝えることが大切です。学習内容を働くことや生きることにつながるという視点が必要です。



②「指導の手法」

教科を学ぶことで培われる能力を、社会で必要とされる力と絡めて伝えるという視点です。例えば、人前で自分の気持ちを表現することがうまくいかない子がいますが、それは社会では必須といえる能力です。ペア学習を多用するとか、発表の機会を常設する等の指導を通して、その力を育てるよう意識すべきです。これは、どの教科の時間でも可能です。



③「学習ルール」

時間を守る、身だしなみを整える、返事をするといった、実社会で必要とされる態度を身につけるという視点です。ここで気を付けたいのは、あくまでも社会に出たときに必要だから身につけさせるのであって、「学校のルールだから」と押さえ込んだ指導にならないことです。卒業したら関係ないルールでは意味がありません。

④職場体験学習等の「体験学習」

学習の内容や指導の手法、学習ルールを通じて学んだことが、実際に社会で使えるかどうかを確認することです。練習を積んである程度力を付けたら試合で試したくなるのと同じこと。それによって「普段先生が言っていたことと同じことを社長が言っていた」「今まで学んできたことは、社会に出て役立つのだな」という気付きとなり、学習に取り組む姿勢へとつながります。



西ノ島町の取組

西ノ島小・中学校では、平成26・27年度の2ヶ年間小中連携キャリア教育推進事業に取り組んでいます。この事業は、社会や地域に貢献しようとする児童生徒の育成をテーマに、小・中・地域が連携したキャリア教育の研究に取り組む、その成果を普及することを目的としています。キャリア教育推進委員会や「生きた学習」部会等の組織づくり、全体計画や年間計画の見直し、小中合同授業研究を計画する等取り組みを進めています。特に、児童生徒の意識調査と分析を行い、「物事をふり返し改善する力」「将来と今の学びを結びつけ生活を工夫する力」を課題ととらえ、付けた力力の焦点化が図られており、児童生徒の実態に沿ったキャリア教育の研究が期待されるところです。

(キャリア教育担当 熊本)